

## 中国における都市近郊農村の経済発展 (Ⅱ)

—上海市宝山区Y鎮S村を事例として<sup>1</sup>

陳 禮 俊

### Abstract

With the Open Door Policy since 1978, positive reform policy and invitation of foreign direct investment have made China experienced a remarkable economic development during the past two decades and at present. However, parallel with the other developing countries, the condition of agricultural production and economy of the vast farming village in China, especially at the mountainous region and remote area, have been remained in a relatively severe situation. Through the Open Door Policy, China has declared with the aim of correcting the different income distributions between rural and urban areas. However, under the existing political and economic structures, policy tends to favor economic growth over the relaxation of the income difference. Moreover, the difference between suburb and city in the identical region is also expanding. This paper investigates the economic development of the suburban farming village in Shanghai city under the socialist market economy, and it aims to clarify the actual condition of the economic development and living environment in a specific area.

*Keywords:* Open Door Policy, income difference, socialist market economy, suburban farming village

---

<sup>1</sup> 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)(1), 課題番号13572022, 代表: 関西大学石田浩教授)に基づき, 上海郊外農村の南匯区D鎮C村と奉賢区Q鎮B村, そして宝山区Y鎮S村の3ヶ所に分かれて農村調査を実施した。本稿は, そのうちの宝山区Y鎮S村の考察である。宝山班の農村調査は, 鎮人民政府と村民委員会の協力のもと, 日本の研究者3名(陳禮俊・滝田豪・小島泰雄)と中国の研究者1名(王昉)が参加した。

## 目次

4. 調査農家の経済構造—農家インタビューに基づいて
5. 農家経済と農外就業の実情—農家アンケートに基づいて
  - 5-1 社会構造
  - 5-2 経済構造
  - 5-3 空間的構造
    - 5-3-1 就業空間
    - 5-3-2 上海との関係性
6. 終わりに

**4. 調査農家の経済構造—農家インタビューに基づいて****(1) 調査村のA氏 (男, 57歳)**

戸主 (女, 62歳) はA氏の妻である。A氏はかつて青海省で働いており、帰郷するまで当地に戸籍はなかった。老夫婦は農業だけで暮らしており、息子一家とは同居していても経済的には分かれている。息子 (37歳) は「汽車修理公司」(自動車修理工場) で働いており、戸籍上「農民」ではなく「居民」である。3年前から「留職停薪(休職)」となり、そのうえ、職を会社に残すために、会社に月300元を払っている(積立金の代わりと思われる)。小学校卒業後、生産隊の規定に従って、15歳から農業に従事し、17歳から14年間村級企業に勤めた後、土地収用にともなう仕事の按配によって、現職に就いた。停薪後しばらくしてから村の聯防隊に入った。これは聯防隊にいた彼の岳父が退休したのち、そのポストを譲り受けたものである。彼の妻は日系資本の「衛生用品公司」で働いており、月600元~700元の給与である。

戸主はすでに農業から定年し、退職金として月に100元受け取っている。土地が収用される前は一人で農業を行い、水稻・小麦を作っていた。A氏は

1950年、15歳のときに上海で瓦工の学徒となり、1952年から上海の企業に勤めた。1955年から「資援大西北」のために会社ごと西安に移り、その後広東、海南を経て1966年から青海に移った。55歳で退休し、鎮から月115元の退休工資を受け取っている。なお、ここはY家宅だが、A氏一家は以前、同じ8隊にあるS巷宅に住んでいた。1983年にそこで熱処理廠ができて土地が収用されたので、今のところに移ってきた。

## (2) 調査村のB氏(女, 57歳)

B戸主(56歳)の妻である。同姓の二人は同じ生産隊の人間で、1969年に結婚した。ともに小卒である。娘が二人で、長女(32歳)とその夫(39歳)、その子(12歳)と同居している。全員「居民戸籍」である。長女夫婦は1990年に結婚した。長女は村級企業の衛生用品公司以働き、夫は大学を出てR鎮の中学で体育教師をしている。長女の戸籍は村にあり、夫の戸籍は学校の集体戸籍、息子は母と同じという規定(上海では2000年に廃止した)に従って当村にある。招婿婚だが結婚式は婿側で挙げた。礼品は渡したが、必要なものは両家で半分ずつ負担した。次女(31歳)は1998年に隣鎮に嫁に行った。夫は農民・電工を経て現在カルフル(外資系スーパー)で働いている。

B氏(妻)は1995年の土地収用により汽車修理公司以仕事をあてがわれたが、仕事に慣れぬまま1997年に退職した。退職金は当初は月300元だったが、経済の変化に合わせて、現在は月500元に上昇している。戸主は1997年10月に下崗し、月280元を受け取っている。2001年4月に「内部退職(内退)」となり、月300元になった。60歳になって正式に退休になったら、月500元もらえるという。下崗後、同村人が経営する上海の橡塑廠で打工し、月500元~600元受け取っていたが、高齢のため2002年1月に帰郷させられ、6月からは隣鎮で門衛をして月500元受け取っている。長女(高卒)の土地は1993年に収用され、彼女はその後衛生用品公司に行った。夫は上海師範大学卒で現在の給与は月2,000元ほどである。

食事は環境衛生所が分けてくれる薪で作る。冬の暖房には昨年電熱台を購

入、夏のためには今年エアコンを買った。飲料水は水道で、洗濯は井戸を使う。水質はだんだん悪くなってきている。

家族全員「居民」なので選挙には参加してこなかったが、退休后、一度だけ2000年末の選挙に参加した。隊長（村民小組長）が投票箱を持って回ってきた。候補者はよく知らない人だった。昔は村の開会に行くと知人が多かった。農業をしている頃は、農地で顔を合わせるのでみんな顔見知りだった。今は互いによく知らない。串門（お喋り）もしない。隊長は候補者のうち一人の名を指さして、この人には絶対「○」をつける、他はつけてもつけなくてもいいと言った。「○」をつけさせられたのは鎮の人だったと思うが、何の選挙だったかすらよく知らない。確かに非民主的ではあるが、選挙など自分には関係ない。

隊の農村戸籍は60人、全体では160数人いる。村レベルでは知り合いが少なくても、隊レベルでは一般にみんな知り合いである。

Y家宅では、Y家同士のつながりはさほど強くないが、結婚・葬式には各Y家が一人代表を送る。家を建てる時など金が必要ときには、かつては親戚に借りたものだが、今は自分で金を持っているので自分で処理する。

### (3) 調査村のC氏（男、57歳、高校卒）

戸主が不在のため、代わりに妻（56歳）をヒアリングした。妻は2年だけ学校に行ったことがある。1970年に24歳で1組から嫁いだ。夫は「宝山鋼鉄工場」の建設による土地収容にともなって環境衛生所に勤めた。当時外に出るのは難しく、彼は兄弟が解放軍に入隊していたので出ることが出来た。環境衛生所は鎮の事業単位であり、勤務地は家の近くにあった。領導を務めたのち、高齢のため普通の職員となり、給与も月2,000元以下となり、勤務地も変わった（転勤して遠くなった）。すでに嫁に出ている娘（32歳）は同じ環境衛生所で働き、月1,000元余り、所の分配で部屋が与えられた。その夫は別の鎮出身で、軍校から部隊に入り、一昨年帰郷して派出所に勤めている。通勤は、宝山区から車で出勤する所長の車に同乗させてもらう。娘夫婦の結

婚は母である回答者の妹が紹介した。妹が勤める工場の同僚が持ってきた話である。娘は学業が振るわず、高校にも中専にも行けなかったので吳淞の国营綿花八廠の技校で学び、そのまま国綿八廠で働いた。八廠の団支部書記を勤めたのでプライドが高く、結婚相手は選り好みしていた。八廠の仕事は女性にはきつく、給与も低いので、父のいる環境衛生所に移った。父の兄弟も夫も共産黨員だが、彼女は黨員の責任の重さ（率先して働く）を嫌って入党しない。親族に黨員多く、希望すれば入党可能だが、八廠を辞めてからは党だけでなく団とも関わらない。

老夫婦と同居する息子（27歳、未婚）は吳淞の上海鉄鋼五廠の技校を出てそのまま勤め、月1,000元余りの給与をもらっている。彼の土地は1986年～1987年に生産隊が収用した。たとえ取られたくなくても上面の規定なので渡さざるを得なかった。今は外地人（外来人口）が耕している。工場建設による土地収用の場合は補償として1畝収用するごとに二人ぶんの仕事を与えられるが、今回のケースでは年1,900元を与えられることになった。

隊に農民戸籍の者は70人余りいる。負担としては年30元の養路费があるが、詳しい内容はよく分からない。今は村内の人間関係が希薄で、村のことには興味がない。隊長が徴収に来て、「上面規定だ」と言えばこちらは何も言えない。30元なので負担は重くない。

人間関係が薄れ、親戚に役人（当官）がいるときだけ、関係が重要になる。当官も、ただの同村人は無視するが、親戚関係は消せないのでもしぶしぶ助ける。

#### （4）調査村のD氏（男、49歳）

D氏は、同じ組に兄弟（長男と四男）が住む三男である。次男は上海市内の飯店の經理である。自分は下崗して3年になる。家が貧しく小学卒に止まった。1981年に同村人（46歳、高卒）と結婚した。自分と妻は同じ香精廠で働いていて、妻は今も月1,000元で働いている。娘（22歳、中卒）が一人で、仕事が見つからない。今は農村では一般に仕事が見つからない。農村戸籍だ

が、1994年～1995年頃離農した。土地補償金は毎年決まっていなかったが、去年は村の規定により一人年400元、三人で1,200元だった。香精廠には1991年から働き、当初は出勤しつつ農業していた。隣村の友達の紹介で、自転車で5分のところにある。1999年に下崗したが、合資なので何ももらえない。

(5) 隣村のE氏 (男, 元村書記, 67歳)

偶然通りかかった隣村の元村書記をヒアリングした。隣村と調査村はもともと一つの生産大隊であった。自分は1952年から1970年まで村の書記を務めた。四年間学校に行き、1947年、12歳で上海に行き衣服づくりの学徒となった。1952年に帰郷し、1954年にY鎮Y区S郷の团支部書記になった。1956年に結婚した。息子は現在村長を勤めている。頼んで帰ってきてもらった。自分は1970年に手術をして書記を辞め、信用社で「経済工作」に従事していた。1996年に退職して退職金は月925元である。妻(69歳)は文盲で、退職金は去年まで月30元、今年から月50元となった。息子(36歳)は2002年6月から村長、給料は村の経済の善し悪しに左右される。高卒後、17歳で鎮の五金廠(金属加工場)で働き、その後上海の人と聯営の窑廠で二年働き、年3万元稼いでいた。現在、社会人入学して大学で学んでいる。その嫁(33歳)は中卒、鎮の十二窑廠(上海の窑廠と聯営)で働き月500元～600元である。孫娘は中学に上がったばかり、自分以外は全員「農業人口」である。0.8畝の自留地で作った野菜を売っている。2001年から農業しなくなったが、その前は一家で4畝～5畝を耕していた。長女(47歳)は鉄廠(鉄鋼場)で会計で、次女(44歳)は小学校も卒業できず、今は合資の香精廠で月1,500元をもらっている。

息子の部屋には空調がある。近くの工場の汚水で川の魚はみんな死んでしまった。黄色い水、黒い水が出てきて、老百姓はとても不満である。幹部は率先して働かねばならない。そうしないと他の人が働かない。

## (6) 調査村のF氏 (女性戸主, 55歳)

小卒で、24歳(1971年)で結婚した。夫(59歳)は隣鎮人で小卒である。自分は1983年～1984年頃からメッキ工場で働いていたが、去年(2001年)の12月にまだ退休年龄ではないのに退休を要求された。55歳なので、今年の10月になれば退職金(月140元～160元)をもらえるようになるが、今はもらえない。夫はすでに働いていた兄の紹介で、南京の化学肥料廠で住み込みで働き、月500元～600元をもらっている。息子(33歳)は中二まで学び、家に金がないので働いた。友達の紹介で汽車廠(自動車工場)で働き、月500元～600元である。社用車で30分かけて通勤している。孫娘(9歳)の小学校の学費は一学期1,000元である。登校時は息子が車で連れて行き、下校時は自分が迎えに行く。土地は1992年頃から無くなった。かつては4畝請け負っていた。上海市区には自分の母の妹が住んでいるが、行ったことはない。幹部はたくさんお金を持っているが、老百姓はそうではない。外地人がゴミ拾いをするにも村長に金を渡している。我々ときたら、水道代は高く、電気代に至っては、20年以上使ってきた電表があまりに速く刻むようになったので交換した。家の前の工場がうるさい。24時間うるさく、夏に寝るときに窓も開けられず、電話も聞こえない。公衆便所は他人の部屋を借りている外地人が使うものだが、上海人のように規矩がないので子供みたいにまき散らして汚い。うちは二世帯の四川人(冶金工廠で働く)に月80円で部屋を貸していた。外地人が減ったので相場が下がった。四川人は自分で探しに来た。しかし、借家に土地証があれば貸しても良いが、なければ「拆(取り壊す)」となる。上海市内なら話は分かるが、こんなところで取り壊してどうするというのだ？ 幹部の姉のところは取り壊されていない。老百姓は不公平感でいっぱいだ。月100元の退休金でどうやって暮らせと言うのだ？

土地収用の補償は年に大人一人1,380元、子供は200元である。一家で4,000元余りをもらっている。しかし、分紅(配当)は年々減っている。一昨年は6,000元あった。幹部に騙された。幹部と関係のある人は良い条件に恵まれる。7組の人たちは、土地収容後の分紅が少ないと集団で村委會に押しかけ

た（造反）。その結果月1,700元に上がったという。

(7) 調査村のG氏（男，58歳）

小卒，妻はバス会社に34年勤めている。自分は農婦戸だ。次男（30歳）は打工で月500元～600元をもらっている。公房を買った。その妻は大隊が養成した医者（無免許の医者）である。孫（5歳）の幼稚園は月295元かかる。長男は宝山鋼鉄工廠で働いている。メッキ廠が汚水を出せるのは，環境衛生所と関係があるから。この現状を君達に反映して欲しいと思う。仕事探しをめぐる競争はますます激しくなってきた。

(8) 調査村のH氏（男，62歳）

H氏は，宝鋼の土地収容後勤めていた公職を退職し，月1,000元余り受け取る。0.1畝の自留地から年1,850元の収入を得ている。「一人当官，鶏犬升天だ」。弟は部隊で出世し，林立果よりも上だったが，「敬軍愛民」の名誉以外何ももらえない。支部書記の収入は20万元は下らない。全て村民の金だ。自分で資金を操作できるのだ。自分の村民の仕事を世話しないで，幹部と関係のある外地人の仕事ばかり世話している。外地人は社会治安を乱している。自留地も工場の汚染で駄目になった。幹部は不動産開発と言って建物作り，老百姓の作った建物は取り壊される。たしかに生活水準はずいぶん良くなったが，不公平感が強い。宝山水泥廠とメッキ廠の汚染は激しい。汚水処理廠を作るべきだ。裏の工場のせいで地面が揺れる。選挙の時は10元渡して無理矢理「○」を書かせる。幹部の腐敗は，ドラマの康熙王朝に出てくるのと一緒だ。

(9) 調査村のI氏（男，55歳）

29歳で結婚，妻は50歳である。土地収容後，大人年2,000元，子供年300元の補償金が支給される。もともと向かいの鋼管廠にいたが，総経理（社長）が3,900万元余りの金をフィリピンまで持ち逃げされたため，今年の5月に



閉鎖された。8年前(1994年)から土地が無くなった。1984年、長男の当兵によってメッキ廠の仕事があてがわれた。妻もそこで10年働いた後に化工廠に移った。土地収用による分配である。普段は休み無く働くが、今日はたまたま休みで家にいる。長男は当兵前から勤めていた工場から当兵後も給与をもらった。党员になって帰郷し、大隊に党費を払っている。自分は21歳のときに生産隊長をやった。報酬は月15工分~16工分。1工分は0.7元に相当。幹部になってもいいことなかった。今の女性組長は堂兄の妻で、月500元もらっている。宝山鋼鉄工廠がやってきて雇用問題が多いに解決した。この村は宝鋼には土地を取られていないが、宝鋼設立にともなう道路拡張によって土地が取られ、仕事があてがわれた。

(10) 隣村のJ氏(男, 74歳)

沈氏は土地改革の幹部だった。元書記(前出E氏)の兄で、小卒である。25歳で結婚した。妻(69歳)は同村人で文盲。自分は60歳で工場から退職して月170元の退職金が支給される。妻は生産隊から退職金をもらい、今年月30元から50元に上がった。二人で住んでいる。息子と娘が二人ずつ。昔は4畝余りあったが、土地収用後は一人年75元受け取る。長男(48歳, 高卒)は「郷辦工廠(鎮級企業)」を数人と一緒に請け負い、月700元余り稼ぐ。その息子(21歳)は今年からカナダに行っている。長男は小学校の代課教師を郷政府の紹介でやっていた。次男(40歳)は3年兵役の後村の紹介で工場に勤めるが、1年前から病気で出勤せず、工場から200元的生活費を受け取っている。

(11) 隣村のK氏(男, 73歳)

半識字。1951年に22歳で結婚した。妻(75歳)は本地人である。1989年に60歳で退職し、退職金は今年月30元から50元に上がった。妻も同じ額である。息子(49歳, 中卒)は村の世話で「村辦工廠(村級企業)」で働く。娘(51歳)が一人いる。1999年に土地収用され、今年から年一人70元の補償がはじ

まった。ほんの気持ち程度でしかないが、抗議しても仕方がないので誰もしない。自留地は0.3畝である。孫(25歳)は宝山鋼鉄工廠におり、1,500元~2,000元稼ぐ。部屋を外地人に貸し、月120元の家賃収入がある。我が村は最も貧しい。隣村(調査村)は豊かである。退職金は120元もある。分かれる前は差はなかったのだが。我が村は経済が悪いので、今年7月に村長が替わり、前村長は今村辦廠長(村級企業の工場長)である。

(12) L氏(男, 31歳)<sup>16)</sup>

L氏が勤めているK耐火材料有限公司は国営企業なので、土日はちゃんと休日となる。妻は小卒で、娘が一人いる。同郷人と一緒に来た。臨時工で月700元~800元の給与をもらっている。妻はY.H.電子廠の臨時工で月450元である。自分の工場は、管理の仕事をする正式工なら月3,000元ももらえる。自分は操作工で8時から4時半まで、1もしくは1時間半の休憩を挟んで仕事。仕事は普通は労務所を通して見つけるが、自分は先に来ていた弟の知り合いの本地人に紹介してもらった。

故郷では年一人300元の負担(農業税、建設費、公路維修費)がある。土地は人に貸している。農業は化学肥料などで元手がかかり損するのでやりたくない。人に貸しても農業税は自分で負担している。中学を出て1993年から色々なところで働き始め、雲南に数ヶ月、江蘇の親戚のところに2ヶ月、その後北京、天津を経て上海へ。現在、衛生費月10元がかかる。また、月2元を派出所に納める。

(13) 隣村のM組長(男, 57歳)

中卒。組長の仕事は月17日で、1日30元である。妻(48歳)も中卒。紙業廠で働き、月750元をもらっている。1995年以前は村の私人が請け負っている企業で4年ほど働き、年3,000元~4,000元。息子(28歳)は中専卒で国営

16) 陳氏は四川人で、中卒、調査村に住むで出稼ぎ労働者である。偶然、開水店(お湯を販売する店)で出会ったが、ヒアリングを要請した。

の動力機廠に分配され、正式工で月1,000元をもらっている。嫁（23歳）は技校出た後ホテルで働き月700元余りの給与である。孫は8ヶ月。岳父の姉が上海に住んでいる。1990年からはじまった農村養老保険に入っている。年1,200元納める規定だが、実際には360元のみを払い、もう何年も納めた。退職したら人によって、それぞれ120元、160元および180元がもらえる。村集体から払われる農業退職金は、保険をかけてない人が受け取る。

土地所有は昔は5畝あったが、3年前に無くなった。自留地は0.2畝で野菜を作って自分で食べる。分田（生産請負）は一人1.2畝で、30年不変とされていた。1999年に収用されて生産隊の集体請負となり…1畝70元（資料1参照）が支払われた。2000年から配当（分紅）がはじまり、一人80元～90元である。

近くの鎮辦化工廠は、風が強いと空気汚染の原因となる。隣村（調査村）の景気がいいのは運が良かった。国道に面している。我が村は新しい工場を建てる土地がなかった。隊長になって10年。年3,000元の手当てがもらえる。隊長の仕事は衛生管理や職務調整等で、退休金を支払うのも隊長の仕事である。土地収用は村で統一して行ったもので、村に専門の役職がある。外地人は蔬菜（野菜）だと1畝430元、水稻だと1畝150元を徴収している。集体で棚子を貸すこともあり、全体の60%を占める。我が隊の外地人請負地は110畝余りあってすべて野菜を栽培している。本地人が請け負っているのは90畝で、野菜園菜より早く果樹園として開発していた。請負費は1畝300元で、本村人が請け負えば補助金がもらえるが、その事例はない。土地収用の時は、事前に隊で開会し、「要種嗎？要種多少？（耕したい？いくら耕す？）」と人々の意思を確認した。だから、みんな自分の意志で差し出したのだ。隊の開会の内容は、土地収用、選挙、上面の命令などである。隊長の仕事はつらいので、人に嫌がられる。妻は、この人はあまりにも正直（老实）なので向いてない、と言う。例えば、掃除の仕事が二人分あって、やりたい人が三人いるときなどだ。最初に隊長に選ばれたときは上の指名で、その後選挙制となり、三回選挙を行った。選挙は戸主を呼んで開会して行う。最近は一人一票になった。投票用紙は空白で、名前を書く形式。村民委員会のように「○」をつけ

る形式とは違う。まず隊長を選び、その後村民委員会の選挙をする。村には生産隊が七つあり、ここは第1隊。140人~50人で60戸。外地人は300人余りおり、派出所に下屬する聯防隊が管理している。

## 5. 農家経済と農外就業の実情—農家アンケートに基づいて

農家アンケート調査の内容は、社会構造（家庭成員基本状況）の基礎情報、経済構造（経済状況）および空間的構造（社会経済活動の範囲）など三つのジャンル、計30項目によって構成されている。回収率は73.9%（170戸/230）であった。しかし、全ての農家が全質問項目に答えてくれたわけではない。また、農家アンケート表記入に際し、出来る限り戸主が記入することを要求した。もし、戸主が不在であれば、家族の者が代わりに記入するように求めた。

ここでは、農家アンケート表から農家経済などに関する質問項目を整理し、農家経済の実情を分析する。

### 5-1 社会構造

回答者（戸主）の性別を表5から見ると、男性が131名（77.1%）で、女性が36人（21.2%）で、無回答が3人（1.8%）である。回答者の年齢構成を表6から見ると、170戸中に全員回答してくれた。170戸中に40代が48人と最多で28.2%を占める。次多が50代の35人（20.6%）、その次が20代の34人（20.0%）、30代の26人（15.3%）、70代の15人（8.8%）、60代の9人（5.3%）、80代の3人（1.8%）と続く。60歳以上の農民が27人（15.7%）であり、高齢化社会へ移行する段階と言ってよいであろう。

表5 回答者の性別

性別	男	女	無回答	合計
人数	131	36	(3)	167/170
%	78.4	21.6	—	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 「無回答」には回答してあるが意味不明のものも含む。

表6 回答者の年齢

年齢	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
人数	34	26	48	35	9	15	3	170
%	20.0	15.3	28.2	20.6	5.3	8.8	1.8	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

回答者の婚姻状況を表7から見ると、無回答の4人(2.4%)と未婚者の10人(5.9%)を除くと、応答者の91.8%が既婚者である。結婚時期を見ると、1980年代が49人の28.8%と最多で、次が1990年代の41人(24.1%)、1970年代の37人(21.8%)で、1970年代～1990年代で計127人の74.7%を占めている。回答者の配偶者出身地を表8から見ると、隣鎮が41人の27.5%を占め、同一鎮内の36人(24.1%)、同村内の31人(20.8%)他省市の23人(15.4%)と、上海郊外農村でしかも郷鎮企業が集積し、外来人口が多いなどの要因が考えられるが、通婚圏は拡大していることがわかる。また、表9は回答者の文化水準(教育水準)である。それによると、無回答の12人(7.1%)を除くと、158人のうち、不識字、半識字および小学校が、それぞれ11人(7.0%)、3人(1.9%)および31人(19.6%)で、中学校、中専・高校および大専・大学が、それぞれ64人(40.5%)、34人(21.5%)および15人(11.8%)である。中学校以上が73.8%を占めており、教育水準が普及していると言ってよいであろう。

表7 結婚時期と婚否状況

年代	既婚者の婚姻時期									未婚	合計
	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	無回答	合計		
人数	11	7	8	37	49	41	3	4	160	10	170
%	6.5	4.1	4.7	21.8	28.8	24.1	1.8	2.4	94.2	5.9	100.1

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

表8 配偶者の出身地

	調査村	調査鎮	隣鎮	宝山	上海市	他省市	無回答	合計
人数	31	36	41	10	8	23	(21)	149/170
%	20.8	24.1	27.5	6.7	5.4	15.4	—	99.9

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 14人が答えた隣接するS鎮は2002年にY鎮と合併しているが、ここでは別の鎮として考えた。また、3回答あった「QB村」は調査鎮の村とするものと(旧)S鎮の村とするものと回答が別れているが、S鎮Q村と解釈した。

表9 農民の文化水準

	非識字	半識字	小学	中学	中専・高校	大専・大学	無回答	合計
人数	11	3	31	64	34	15	(12)	158/170
%	7.0	1.9	19.6	40.5	21.5	9.5	—	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

## 5-2 経済構造

農家経済に関わる質問項目を整理し、その実態を考察することにしたい。表10に見られるように、有効回答者の150戸(88.2%)のうち、農家の主要な収入源は、農業が5.9%で副業の0.7%を加えると6.6%と1割にも達していない、93.4%は農外収入に依存していることになる。そのうち、正式工が80人(52.3%)で最も多く、郷鎮企業などの発展によって就業環境に恵まれていることが窺える。また、経商(商売・自営業など)が18人(11.8%)で、第三次産業へ移行しはじめているが観察されている。就業地点に関して、有効回答者272人のうち、111人(40.8%)が村内で、33人(12.1%)が鎮内で、112

人 (41.2%) が宝山区内で農外就業をしていることがわかる。

表10 農家の主要収入源 (複数回答あり)

	農業	副業	経商	正式工	臨時工	打工	その他	無回答	合計
人数	9	1	18	80	7	31	7	(20)	153/150
%	5.9	0.7	11.8	52.3	4.5	20.3	4.6	—	100.1

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

表11の農家の総収入 (年収) を見ると、有効回答者の158戸 (92.9%) のうち、3,000元以下が5戸 (3.2%) で、3,000元~5,000元が7戸 (4.4%) で、5,000元~1万元が6戸 (3.8%) で、1万元以下の農家はわずか11.4%を占めている。4万元以上の農家が52戸 (32.9%) を占めており、平均収入は3万1,379元にも達している。回答者の農外就労の期間を表12から見ると、最多が15年以上で42人の31.3%を占めており、10年以下および15年以下がそれぞれ29人 (21.6%) および23人 (17.2%) を占めている。ということは、農外就労は比較的早期にはじまっているのみならず、表10で見られたように比較的安定な就業環境に恵まれているということにもなる。

表11 農家の総収入 (年収)

金額	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	無回答	合計
戸数	18	13	21	21	15	15	3	52	(12)	158/170
%	11.4	8.3	13.3	13.3	9.5	9.5	1.9	32.9	—	100.1

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) ①1万元未満, ②1万~1.5万元, ③1.5万~2万元, ④2万~2.5万元, ⑤2.5万~3万元, ⑥3万~3.5万元, ⑦3.5万~4万元, ⑧4万元以上。

表12 現在の仕事の就労期間 (複数回答あり)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	無回答	合計
人数	0	0	4	2	10	24	29	23	42	(40)	134/130
%	0.0	0.0	3.0	1.5	7.5	17.9	21.6	17.2	31.3	—	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) ①3ヶ月以下, ②6ヶ月以下, ③1年以下, ④2年以下, ⑤3年以下, ⑥4年以下, ⑦10年以下, ⑧15年以下, ⑨15年以上。

回答者の将来展望に対する意識について質問したのが表13である。回答者本人に将来どのような職業に就きたいのかを質問すると、「離農して都市に就労したい」という者が最も多く、35人の28.0%を占めている。調査村では現に比較的高い収入とよい就業環境に恵まれているにもかかわらず、「離農」という希望が多いことは、農家の経済力の向上にともなって、生活環境が比較的よい都市部へ移りたいという要因が含まれていると考えられる。次に、経営者と労働者になりたい者が、それぞれ31人(24.8%)と25人(20.0%)である一方、農業はなく、副業はわずか3人(2.4%)と非常に少ない。回答者の子供に対する希望については、国家幹部にさせたいが34人の27.2%、続いて経営者が26人の20.8%、労働者が24人の19.2%、離農して都市に就労させたいが20人(16.0%)、進学が17人(13.6%)となり、回答者本人の内容とは少し異なるが、農業や副業については皆無である。また、子供に対する国家幹部や進学の希望が、合わせて51人の40.8%で、教育に熱意を持つ傾向が見られると言ってよいであろう。

表13 回答者の将来に対する希望と子供の将来に対する希望 (複数回答あり)

将来に対する希望	農業	副業	経営者	労働者	国家幹部	進学	離農して都市で就労	その他	無回答	合計
本人	人数 0	3	31	25	10	4	35	17	(49)	125/121
	% 0.0	2.4	24.8	20.0	8.0	3.2	28.0	13.6	-	100.0
子供	人数 0	0	26	24	34	17	20	4	(45)	125/125
	% 0.0	0.0	20.8	19.2	27.2	13.6	16.0	3.2	-	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 本人の「その他」には、良い晩年、健康、社会貢献などが含まれる。

現在最も欲しいものは何かについて、表14を見ると、回答者の4割が「お金」と答えている。次がその他(10.2%)であり、よい仕事(9.4%)、よい生活(8.7%)、無し(7.1%)、子の学業成功(6.3%)、学業知識(6.3%)と続くが、ここにも教育に対する執着が見られている。



表14 現在最も欲しい物（複数回答）

	お金	良い仕事	良い生活	無し	子の学業成功	学業知識	家	安定保障	健康	その他	無回答	合計
人数	51	12	11	9	8	8	5	5	5	13	(52)	127/118
%	40.2	9.4	8.7	7.1	6.3	6.3	3.9	3.9	3.9	10.2	—	99.9

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 「その他」には、自己充実、パソコンなどが含まれる。

### 5-3 空間的構造<sup>17)</sup>

#### 5-3-1 就業空間

調査村農民の農業外就業地の特徴は、表16で見られるように、村内就業が4割を越えていることである。表15にあるように「正式」と「臨時」の労働者として働く者が、それぞれ159人（49.1%）と65人（20.1%）を占めることから、こうした村内就業の多さが、村内の工場の展開と結びついていることは明らかであろう。村外就業で特徴的なのはY鎮における就業が21人の8.1%と、1割に満たないことと、100人（38.5%）が宝山区と答えるように、鎮外へと広がっていることである。こうした就業空間の構成から、通勤の手段は、表17に示される通り、58人の46.0%と、半分近くは自転車が占めているが、バイクが36人の28.6%と、3割近くに上っており、バスも18人（14.3%）となっている。こうした交通機関の近代化が就業機会を空間的に拡大していると考えられる。その結果、通勤時間は表18にあるように、47人の61.8%と、6割が半時間内におさまっている。

表15 各人の職業

	正式工	臨時工	経商	打工	郷村幹部	その他	合計
人数	159	65	39	52	3	6	324
%	49.1	20.1	12.0	16.0	0.9	1.9	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 経商と郷村幹部に正式工との重複回答が一人ずつある。その他には退休、学生等が含まれる。

17) 本節は地理学的概念を含んでおり、執筆に当たって、小島泰雄の分析・示唆に依拠するものが多い。

表16 各人の就業地点

	S村	Y鎮	宝山区	上海市	外省市	その他	合計
人数	111	21	100	13	1	14	260
%	42.7	8.1	38.5	5.0	0.4	5.4	100.1

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) その他は、「不定」、「宝钢」、および「Y鎮」と「宝山」を同時に記した12件、から成る。この12件はY鎮、宝山区の項目には加算していない。

表17 通勤手段

	自転車	バイク	バス	徒歩	車	その他	無回答	合計
人数	58	36	18	4	8	2	(44)	126/170
%	46.0	28.6	14.3	3.2	6.3	1.6	—	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

表18 通勤時間

	10分台	20分台	30分台	40分台	50分台	1時間台	6時間以上	無回答	合計
人数	17	14	16	2	1	11	15	(94)	76/170
%	22.4	18.4	21.1	2.6	1.3	14.5	19.7	—	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 「6時間以上」についてはどのように解釈すべきか不明だが、人数が多いのであえて項目を立てた。

### 5-3-2 上海との関係性

調査村から上海市の中心部までは直線距離で20キロほどである。都市化の進んだ地域に属する調査村の住民は上海とどのような関係を取り結んでいるのであろうか。調査村のアンケート調査（総数170部）によりつつ考えてゆく。検討項目は、農産物の販売先としての上海、上海との往来、上海の親族・親戚の三つである。

まず、表19に表されているように、農産物を上海に販売しているという回答は42人（25%）であった。そして、そのうちの83.3%が野菜の販売・出荷を行っている。野菜以外には果物21.4%、鶏4.8%、米と魚がそれぞれ2.4%の農家で売られている。調査村は農地を集約し大規模化することを外部者へ

の委託により実現しているもので、そこからはずされた自給的農地や庭先における生産物が上海に出荷されていることがわかる。家計においては補助的な部分になる農業生産においても、近郊農業的な展開が観察される点に注目したい。

次に、表20に示された上海に年に何回出かけるか、という問いへの答えは、多数回とするものが回答（総数150）の24.7%を占めて最も多くなっている。しかし、それに続いて多い回答はそれほど出かけないとするもので、年に4回までの回答で66.1%、全体の半数を超えている。また、12.7%の人々が1回も行かないとしている。表21の上海へ行く理由（総数128、複数回答）としては、買い物が61.7%で最も多くなっており、続いて遊び（35.2%）、見物（14.1%）、親戚訪問（7.8%）などとなっている。

こうした数値が表す調査村住民と上海との結びつきは、次のように整理されよう。上海と頻繁に往復する人々が全体の24.7%と、4分の1を占めるものの、過半の人々にとっては、買い物、遊びや見物に象徴される都市的消費が、依然として「非日常的な活動」として認知され、その場として上海が存在していると言ってよいであろう。こうして見ると、20キロという距離を乗り越える日常的な生活空間は、なお形成途上にあるということができそうである。

上海との関連を考える三点目は、上海に親戚・親族はいるか、という問い（表22・表23）をめぐってのものである。回答者（124人）の40.3%が上海に親戚・親族を有していた。しかし、頻繁な交流を行っているのは回答者（66人）の22.7%と、2割余りにとどまる。年に4回以内の交流に限られるとする回答が21人の31.8%と、3割余り、交流をしない者が27.3%と、3割近くを占める。調査村の住民にとっては上海に住む親戚・親族との交流もまた、非日常的な活動としての性格が主体であることが理解される。

調査村の老農民への聞き取りは数例にとどまるが、そこから復元される半世紀余りの時間軸においても、調査村住民と上海との関係性は限定的である。例えば、民国期においては上海で購入した自転車を使って上海まで野菜や人

を運んだ事例や、屎尿船がやってきていた記憶などに限られる。

こうして見ると、調査村と上海との結びつきは、農村工業に代表される、地域産業が都市的な傾向を深めていることと比べると、それほど強いものではないことがわかる。歴史的にも上海との関わりは限定的であったと見なされることから、日本において近郊農村が郊外として都市圏の中で再編成されてゆくような状況は、いまだ萌芽的であると総括されよう。表16にある、農外就業者の5.0%が上海で働く状況も、この構図の中で理解できるのではないであろうか。

表19 上海に売る農産品 (複数回答あり)

	米	野菜	果物	鶏	魚	無回答	合計
戸数	1	35	9	2	1	(128)	48/42
%	2.4	83.3	21.4	4.8	2.4		

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) %は合計48回答中に占める割合ではなく、回答のあった42戸の中に登場する割合である。例えば、回答した戸のうち83.3%が野菜を売っている。

表20 一年間に上海へ行く回数

回数	0	1	2	3	4	5~10	数回	多, 無数	不定	無回答	合計
人数	19	28	27	15	10	9	2	37	3	(20)	150/170
%	12.7	18.7	18.0	10.0	6.7	6.0	1.3	24.7	2.0	—	100.1

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 「1, 2回」, 「3, 4回」などは、それぞれ「2回」, 「4回」というように多い方をとった。

表21 上海へ行く目的 (複数回答あり)

	買い物	遊び	見物	探親	商売	学習	その他	無し	無回答	合計
人数	79	45	18	10	6	4	4	2	(42)	168/128
%	61.7	35.2	14.1	7.8	4.7	3.1	3.1	1.6		

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) %は全168例中に占める割合ではなく、回答のあった128戸中に登場する割合である。例えば、128戸中61.7%が買い物をあげているということである。

表22 上海に親戚がいるか

	有	無	無回答	合計
人数	50	74	(46)	124/170
%	40.3	59.7	—	100.0

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

表23 一年間に上海の親戚と往来する回数

回数	0	1	2	3	4	5~10	数回	多	不定	無回答	合計
人数	18	2	81	11	2	6	3	15	1	(104)	66/170
%	27.3	3.0	2.1	16.7	3.0	9.1	4.5	22.7	1.5	—	99.9

出所) 農家アンケート調査結果の集計より作成。

注) 「1, 2回」, 「3, 4回」などは, それぞれ「2回」, 「4回」というように多い方をとった。

## 6. 終わりに

中国における郷鎮企業は, 1990年代から市場経済の変化にともない, 急速に衰えつつあると言われている。しかし本稿では, その発展の原型が未だ残っている事例をつきとめた。

調査村は村と住民ともに豊かである。それは村内に立地する工場から給料や土地使用料などの形で資金が流れ込むからである。宝山農村の一般的な特徴でもある地域的な産業化が進んでいることがその原因である。しかし, 隣村への訪問から明瞭に感じられたことでもあるが, 調査村の豊かさは先鋭的なもので, いわゆる「モデル村」であることをこの事例を扱う際には留意すべきであろう。さらに住民との対話を重ねる中で, 不平不満という形で吐露される, いわば「豊かさの中の格差」, 「地域内格差」が看取されたことも重要な発見であろう。このことは, 経済発展に取り残された農民の幹部に対する見方が厳しくなっている理由の一つと言ってよいであろう。

もう一つの調査村の特徴は, 外来人口の多さである。在来住民にとっては, 部屋を貸すことで安定した収入が見込め, 一方の外来者にとっては農業から非農業部門へと拡大する就業機会が魅力となっている。ただし, 部屋の取り

壊すに対する不満の声は、幹部と農民との間の矛盾が表面化していることを意味している。こうした外来人口の存在についての解明の多くは残された課題とせざるを得ないが、外来人口の予想を越えた存在は都市近郊農村の一つの特徴を示すものとして、今次調査の一つの重要な成果となっている。

### 農家インタビューの様子

